

日本通貨の大きさの過大評価と過小評価 (2)

—小学生の場合—

○川名好裕、齊藤 勇

(立正大学心理学部)

key words : 通貨の大きさ、過大評価、過小評価

【問題】

Bruner, J. S. & Goodman, C. C. (1947) が半世紀以上前に行ったアメリカで使用されている硬貨の大きさを子供達が過大評価するという古典的な研究を、川名、齊藤 (2008) は最近の日本で追試してみた。日本の20歳前後の女子大生で行った実験の結果、過大評価どころか過小評価されるという結果が出た。100円以下の硬貨では過大評価ではなく過小評価がされていた。唯一、過大評価されていた硬貨は、500円硬貨のみであった。過大・過小評価率については、より貨幣価値の低い貨幣はより過小に、貨幣価値の高い貨幣はより過大に大きさが評価されていた。Bruner, J. S. & Goodman, C. C. (1947) では、アメリカの子供は当時の貨幣については全て過大評価をしており、女子大生では100円以下は過小評価をしているという点が異なっていた。この2つの実験の結果が違う理由として考えられるのは、1. 被験者の年齢 2. 貨幣価値の時代的变化 3. 日米文化の違い 4. 調査方法の違いなどが考えられる。そこで、今回の研究では、「被験者の年齢」の違いに注目して、アメリカで行われた子供の被験者に年齢的に対応する日本の小学生で調査データを集めてみるという試みがなされた。

【方法】

被調査者：

関東近県の小学校の小学生男女 (3年生、4年生、5年生、6年生) を対象に、アンケート調査を授業の一部の時間を使って集合形式で実施した。データ分析に使われた有効データ数は、162人であった。

アンケート項目は、全部で30問であるが、質問項目は、

次のような質問群から構成されていた。

- ① 日本で使用されている硬貨 (1円玉、5円玉、10円玉、50円玉、100円玉、500円玉) と紙幣 (千円札、5千円札、一万円札) の想像上での推定の大きさを回答させる質問群。硬貨については、直径何センチ、何ミリ位かを回答させ、紙幣については、縦と横とがそれぞれ何センチ、何ミリ位かを回答させた。(問1～問12)
- ② 次に、1円から1万円までの各硬貨、紙幣についてそれぞれが、どの程度価値があるものであるかを、1. 「まったく価値がない」～7. 「たいへん価値がある」の7段階尺度で回答させた。(問13～問21)
- ③ 最後に、1円から1万円まで、各貨幣で何を買うことができるかを自由記述法でたずねた。(問22～問30)

【結果と考察】

表1に今回の小学生のデータと前回 (2008年) の女子大生のデータから計算された日本の硬貨の過大評価率と過小評価率を比較のために同じ表に示す。計算は、(過大・過小評価率) = (想像上の硬貨の直径) ÷ (実際の硬貨の直径) × 100 で計算され、100%以下を過小評価、100%以上を過大評価とした。表の上の3行が今回の小学生の結果で、第4行目が前回の女子大生の結果である。最初に気づくのは、女子大生では、50円以下で過小評価、100円以上で過大評価されて

表1. 日本の硬貨の過大評価率と過小評価率

評価者	1円	5円	10円	50円	100円	500円
小学生男性	87%	98%	118%	123%	139%	154%
小学生女性	75%	93%	102%	113%	121%	128%
小学生	81%	95%	110%	118%	130%	140%
女子大生	69%	78%	89%	90%	100%	109%

いる。それに対して小学生では、10円以上で過大評価、5円以下で過小評価がなされているという点である。小学生では、貨幣価値が上がるに対応して段階的に過小評価から過大評価へと知覚が変化している。アメリカの古典的研究の結果と違うのは、アメリカでは1セントから過大評価されていたが、日本の貨幣では、1円、5円では過小評価されているという結果が異なる。質問項目でそれぞれの貨幣で買えるものを自由記述で調べているが、小学生たちは1円、5円では「買うものがない」と答える子供が多かった。女子大生では50円以下で過小評価しているが、女子大生の年齢では50円以下では、ほとんど自分たちが必要とするものを「買えない」と認識しているのであろう。100円となると、100円ショップでの物や飲物類が買えることを考えると、過小評価から過大評価の境界点である100%は、単独の貨幣でものが買えるか、買えないかの境界点として解釈できるであろう。現在の経済状況では、100円以下のお金は、単独で買えるものが少なく、消費税込の合計金額の端数を払う時に使われているのが現実である。

表2. 日本の紙幣の過小評価と過大評価率

評価者	千円札	五千円札	一万円札
小学生男性	84%	85%	87%
小学生女性	84%	84%	86%
小学生	84%	84%	86%
女子大生	100%	102%	106%

硬貨と紙幣は形も大きさのレベルも違うので同等に扱えないので、表2に千円～1万円の紙幣の過大・過小評価率を別に示す。紙幣については縦、横の長さの推定から対角線の長さを計算し、それを実際の紙幣の対角線と比較して過大・過小評価率を計算している。女子大生では、多少の過大評価の方向に紙幣を知覚しているが、小学生では過小評価されているのが大きな違いである。その説明の可能性として、現実での紙幣への「接触可能性」が考えられるが、その解釈の是非については、今後の研究に期待される場所である。

【引用文献】

Bruner, J. S. & Goodman, C. C. (1947) Value and need as organizing factors in perception. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 42, 33-44
 川名、齊藤 (2008) 日本通貨の大きさの過大評価と過小評価 日本心理学会 第72回大会発表論文集 p. 260
 (KAWANA Yoshihiro, SAITO Isamu)